

学習者の学び方から学ぶ—台湾調査より—

金田 智子(国立国語研究所)

1. はじめに

日本語学習者及び日本語教育関係者に対して適切な支援を行うためには、日本語教育の現状を様々な観点から把握する必要がある。特に、近年の科学技術の進歩や国際交流活動の多様化は、日本語の学習環境や学習手段を変容させ、学習活動と教授活動の両面に影響を与えていることが予想される。

国立国語研究所では、これらの変化をとらえ、支援の方向性を探るための基礎資料を提供することを目的に、2001年から2005年にかけて、タイ(バンコック)、韓国、オーストラリア(ビクトリア州)、マレーシア、日本で「日本語教育の学習環境と学習手段に関する調査研究」を実施した。その結果、日本語や日本文化に直接触れる環境にない国・地域においても、日常生活の中で、身の回りにある様々な人・物・場や機会といったリソース(学習資源)を通じて日本語や日本文化に接触している学習者がいること、その一方で、周辺に多くのリソースがあっても、それを意識的に利用するに至らない学習者も多く存在することなどが明らかになっている。

本研究の調査地の一つである台湾では、2003年から2005年にかけて調査を行った¹。本論では、2003年から2004年までに台湾で実施した学習者用アンケート調査の結果をもとに、台湾の日本語学習者のリソース利用の特徴を、台湾での地域別比較や他調査地との比較を交えながら紹介する。同時に、日本語能力別比較も行い、言語学習者というものの行動について考える一助としたい。

2. 調査概要

2.1. 調査対象・期間・方法

台湾で日本語教育を実施している機関(中等教育機関、高等教育機関、学校教育以外の機関)における日本語学習者と日本語教師を対象に、アンケート調査を2003年12月から2004年2月、インタビュー調査を2004年6月から2005年11月に実施した。インタビュー調査では、いわゆる教育機関には属さない日本語学習者等も対象としている。

2.2. 調査票(学習者用アンケート)の内容

学習者用アンケートでは、まず、属性として、性別、居住地域、年齢、母語、身分、日本語学習の開始学年、日本語学習の場所、訪日経験、日本語学習動機、4技能別日本語力自己評価等をたずねた。質問項目は、日本語使用状況(相手、頻度、手段、内容、理由等)、日本語接触状況(物、機会、頻度、内容、理由等)、授業で使用する日本語教材の授業外使用状況、日本語学習のための教材等の利用状況、日本語学習のために充実を希望するもの、等である。

2.3. 回答者数

学習者用アンケートの有効回答数は 3,447 である。学習者回答数の機関別内訳を表 1 に、地域別内訳を表 2 に示す。尚、台湾の教育制度については、本報告書の「3.1.5. 台湾の学習環境の概要」を参照されたい。

表 1 学習者回答数・内訳 ()内は%

	合計	中等教育	高等教育	学校教育以外
回答者数	3447 (100)	926 (100)	2075 (100)	446 (100)
(内訳)				
中学校	39 (1.1)	38 (4.1)	0 (0.0)	1 (0.2)
高校	757 (22.0)	720 (77.8)	0 (0.0)	37 (8.3)
専科学校	641 (18.6)	166 (17.9)	411 (19.8)	64 (14.3)
二年制技術学院	268 (7.8)	0 (0.0)	247 (11.9)	21 (4.7)
四年制技術学院	196 (5.7)	0 (0.0)	192 (9.3)	4 (0.9)
大学	1219 (35.4)	0 (0.0)	1120 (54.0)	99 (22.2)
大学院	103 (3.0)	0 (0.0)	70 (3.4)	33 (7.4)
その他	146 (4.2)	1 (0.1)	11 (0.5)	134 (30.0)
無回答	78 (2.3)	1 (0.1)	24 (1.2)	53 (11.9)

表 2 学習者回答数・地域別内訳 ()内は%

	中等教育	高等教育	学校教育以外	合計	
北部	340 (36.7)	686 (33.1)	237 (53.1)	1,263	(36.6)
中部	333 (36.0)	513 (24.7)	31 (7.0)	877	(25.4)
南部	129 (13.9)	661 (31.9)	36 (8.1)	826	(24.0)
東・島嶼部	66 (7.1)	63 (3.0)	0 (0.0)	129	(3.7)
不明	58 (6.3)	152 (7.3)	142 (31.8)	352	(10.2)
合計	926 (100.0)	2,075 (100.0)	446 (100.0)	3,447	(100.0)

回答者のうち、女性の占める割合は 75.4%、男性は 23.2%である。母語は中国語 91.9%、台湾語 5.9%である。年齢は、中等教育では 10 代が 89.7%、高等教育では 20 代が 74.6%と最も多い。学校教育以外では、20 代が 49.1%と最も多いが、30 代以上も半数近くを占めている。

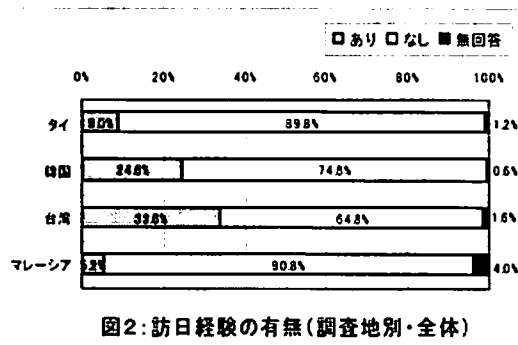
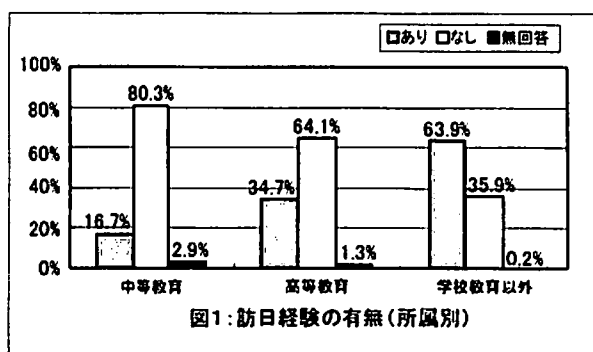
3. 調査結果

質問項目の中から、学習者がどのようにヒト(人)、モノ(物)、コト(場や機会)といったリソースに触れ、それらをどう利用しているのか、どういった方法で日本語を学んでいるのかがわかる項目を選び、その結果を分析する。必要に応じ、他調査地域(タイ<バンコク>、韓国、マレーシア)との比較を行う。また、台湾内での地域間比較及び日本語能力による比較を行った結果も示す。

3.1. 訪日経験

全体の 33.6%は訪日経験がある。中等教育では 16.7%、高等教育 34.7%、学校教育以外 63.9%の学習者に訪日経験があり、教育段階の上昇に従い、訪日経験のある人の割合が高

くなっている(図1)。また、タイやマレーシアに比べ、台湾は訪日経験のある学習者が多い(図2)。



3.2. ヒトとの接触

日本語の授業以外で学習者が実際に日本語を使ってどのようなやりとりをするのか、やりとりの有無、相手、手段、内容等について尋ねた。まず、やりとりをすることがあるかどうかについての結果は以下の通りである。

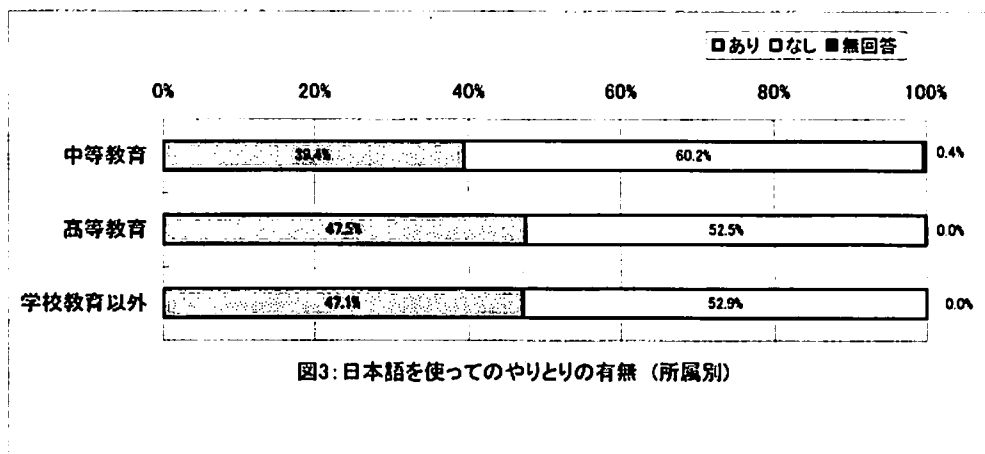


図3に見られるように、日本語の授業以外で日本語を使ってやりとりをする学習者は中等教育でも40%近くおり、高等教育や学校教育以外では半数近い。個人により、やりとりの頻度等に違いはあるが、多くの学習者が授業を離れても日本語を使って何らかのやりとりをしていることがわかる。

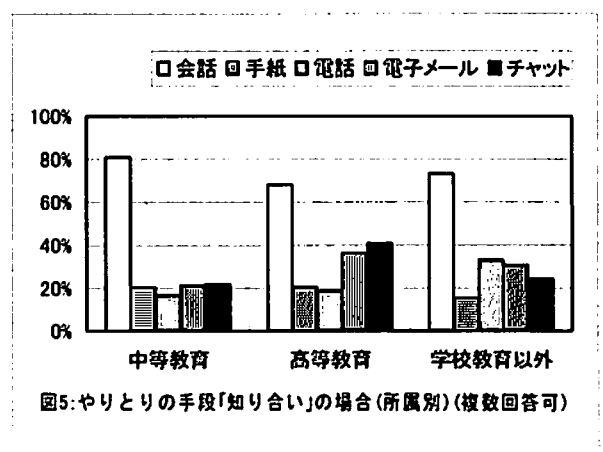
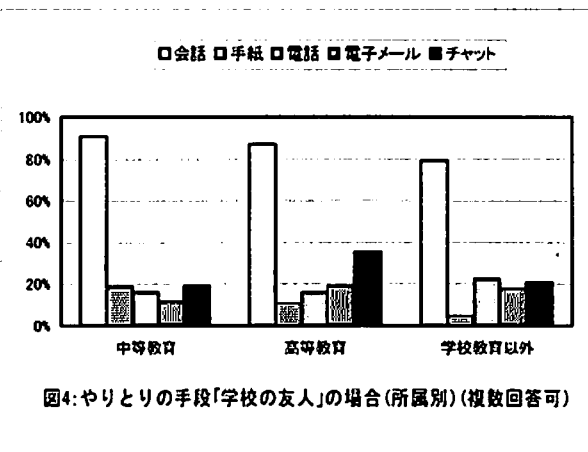
やりとりの相手は、中等・高等教育では「学校の友人」「日本語の教師」「知り合い」の順で多く、回答者全体においても同様の順となっている。学校教育以外では「日本語の教師」「塾や語学学校等のクラスメート」「知り合い」であり、日本語を学ぶ場で接する人とのやりとりが中心であり、それに次いで「知り合い」とのやりとりが多いことがわかる。

表3 やりとりの相手 ()内は回答数

順位	合計	中等教育	高等教育	学校教育以外
1位	学校の友人 (995)	学校の友人 (252)	学校の友人 (676)	日本語の教師(121)
2位	日本語の教師(970)	日本語の教師(227)	日本語の教師(622)	塾や語学学校等の クラスメート(91)
3位	知り合い (763)	知り合い (199)	知り合い (485)	知り合い (79)

(複数回答可)

やりとりの相手によって、その手段が異なるかどうかを比べてみると、「日本語の教師」では「直接会って話す(会話)」人が所属機関に関わらず多く、他の手段を用いている人は少ないが、相手が「学校の友人」や「知り合い」の場合は、チャットや電子メールなど、他の手段も多く用いられている(図4、図5)。特に「知り合い」の場合、日常的に顔を合わせるような状況にあるとは限らず、こうした通信手段が多く用いられていると考えられる。逆に、こういった通信手段が開発されたことにより、海外の知り合いなど、容易に会うことのできない人との接触機会を保つことが可能となり、学習者にとって、日本語を用いたやりとりの幅が広がっているとも言える。



「知り合い」とのやりとりにチャットや電子メールを用いるという点については、他の調査地域においても似た傾向がある(表4)。

表4 やりとりの手段「知り合い」の場合—調査地別比較— (%)

手段	タイ	韓国	台湾	マレーシア
会話	71.7	52.9	72.1	60.2
手紙	25.5	29.5	19.8	20.7
電話	28.9	33.7	19.7	17.9
電子メール	35.8	49.9	31.7	37.2
チャット	—	19.4	34.1	30.3

(複数回答可)

本調査は地域によって調査時期が異なるため²、調査地域別の比較をする際には注意が必要であるが、4つの調査地域に共通して、電子メールが、台湾とマレーシアでは、それに加えてチャットがやりとりの手段として重要な位置づけとなっていると考えられる。尚、当初、やりとりの手段としてチャットは選択肢に含まれていなかった。しかし、タイ調査を実施した際、自由回答への記述や聞き取り調査などから、チャットの活用が広がっていることがわかり、翌年の韓国調査からは選択肢に含めた。残念ではあるが、チャットの利用率が台湾とマレーシアにおいて高い理由が、地域性によるものか、チャットの普及によるものかは本調査のデータから予測することはできない。

アンケート調査では、やりとりをする相手の中から「最もよくやりとりをする相手」に関し、やりとりの頻度、方法、内容などを、さらに詳しくたずねている(表5)。やりとりの内容については、台湾では所属に関わらず、「生活について」が最も多く、これは、他の調査地域と共通している。「趣味について」は、台湾の場合、中等教育で3位、高等教育で2位、全体でも3位に挙がるものであるが、他調査地域においてはいずれの教育段階でも3位以内には入らない。これは、後述するモノやコトの利用とも関連するが、台湾の学習者にとって、日本語が「学習」以外のものとも結び付いていることを表していると考えられる。

表5 やりとりの内容-最もよくやりとりする相手の場合- (%)

順位	タイ	韓国	台湾	マレーシア
1位	生活 52.8	生活 62.3	生活 64.0	生活 38.1
2位	勉強 44.2	勉強 20.8	日本語 38.7	勉強 36.9
3位	日本語 25.0	日本語 15.6	趣味 38.4	日本語 25.7

ここまで述べてきたように、台湾には日本語によるやりとりを、方法においても、内容においても豊かに行っている学習者が数多くいる。その一方で、授業以外で日本語を使わないという学習者も半数以上いる(図3)。その理由を所属別に見ると、中等教育では「自分の日本語力が充分ではないから」(42.9%)が、高等教育・学校教育以外では、「日本語を使う相手がいないから」(それぞれ、50.7%, 71.2%)が最も多い。つまり、相手さえいればやりとりをするという学習者が台湾には多いのである。

「日本語力の不足」と「相手の不在」が理由の上位に挙がるのは、タイ、韓国にも見られる傾向である。しかし、コンピュータの導入状況など、日本語の学習環境が比較的似ていると考えてよい韓国と台湾を比べた場合、韓国では中等教育はもちろん、高等教育機関であっても日本語力の不足を第一の理由として挙げる学習者のほうが多い。これは、韓国と台湾の学習者の言語学習観やコミュニケーション観の違いの現れと捉えることもできるだろう。

表6 授業以外で日本語を使わない理由 (%)

日本語を使わない理由	タイ	韓国	台湾	マレーシア
日本語を使う相手がいないから	43.2	32.2	49.5	14.6
日本語を使いたいと思わないから	0.9	3.6	2.8	1.7
自分の日本語力が充分ではないから	43.2	43.0	33.2	63.0
恥ずかしいから	1.2	0.3	1.5	0.6
自信がないから	-	6.5	3.4	4.2
母語や英語などの方が便利だから	8.3	8.8	7.3	5.2
その他	1.4	3.0	0.6	0.1
無回答	1.5	2.6	1.8	10.7

3.3. モノとの接触

学習者の身の回りにある、日本語で書かれたものや日本語が使われているものに対する見聞きについて、見聞きの有無、対象、頻度等についてたずねた。

身の回りに日本語で書かれたものや日本語が使われているものがあると答えた 2,867 人の内、日本語の授業以外の時間に、それらを見たり聞いたりすることがあると答えたのは、2,683 人(93.6%)である。所属による違いはなく、他調査地域と比べても大きな差はない。

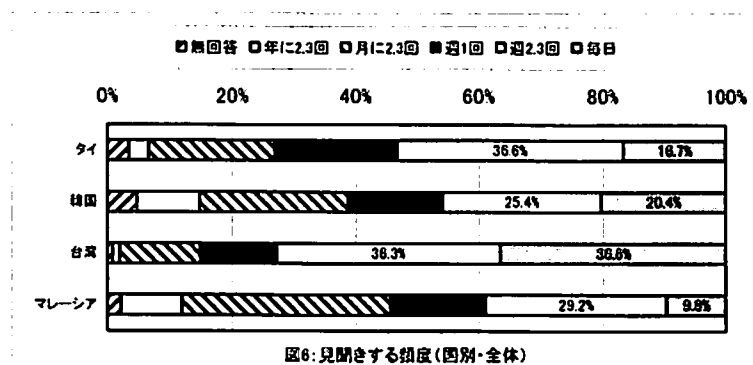
見聞きするもので最も多いのはテレビ番組であり、これは所属を問わず第1位となっている。他の調査地域と比べても、テレビ番組を見聞きする人の多さは目立つ(表7)。これは、台湾が日本からのテレビ番組輸出量が世界で最も多く、日本番組専門チャンネルなどが存在することと関係があると思われる。

表7 授業以外で見聞きするもの (%)

順位	タイ	韓国	台湾	マレーシア
1位	テレビ放送 56.2	マンガ 52.8	テレビ番組 86.3	ビデオ・VCD・DVD 63.8
2位	マンガ 53.8	テレビ番組 48.0	CD 61.6	テレビ 57.2
3位	雑誌 48.1	ビデオ・DVD 47.8	マンガ・アニメ 59.4	マンガ・アニメ 39.0

(複数回答可)

最もよく見聞きするものを1つ挙げた場合も、台湾では、テレビ番組(41.6%)、CD(16.0%)、マンガ・アニメ(12.0%)の順である。そして、見聞きする頻度を見ると、「毎日」と「週2,3回」が多く、両者をあわせると72.9%となり、日本語が使われているものを日常的に見たり聞いたりしている人が多いことがわかる。



3.4. コトの利用

学習者が授業以外の様々な日本語学習の場や機会をどのように利用しているのかについてたずねた。

何らかの場や機会を利用したことがある学習者は 39.4%，ない学習者は 58.9%であった。利用経験のある学習者 1,357 人に、これまでに利用した経験のある場や機会をたずねたところ、台湾での利用経験があると答えたのは 1,155 人で、表 8 に示すように「日本語のカラオケ」が最も多かった。台湾は、カラオケのできる場所、カラオケ機材を持つ家庭が多い。

表 8 利用経験のある場や機会—台湾— (%)

順位	全 体	中等教育	高等教育	学校教育以外
1位	日本語のカラオケ (48.0)	日本語のカラオケ (47.1)	日本語のカラオケ (49.6)	日本語のカラオケ (42.8)
2位	日本・日本語に関するイベント (36.8)	日本・日本語に関するイベント (37.7)	日本・日本語に関するイベント (37.7)	日本語が使われている職場でのアルバイト・仕事 (29.9)
3位	日本人のいる場所、日本人が集まる場所 (22.2)	日本人との交流会 (33.2)	日本・日本語に関する資料センター・図書館 (26.7)	日本・日本語に関するイベント (23.5)

(複数回答可)

また、後述する「日本語学習のために現在使っているもの」の第3位に「日本語の歌」が挙がっており、台湾の学習者はカラオケやテレビ番組などを通じて日本語の歌になじみがあるだけでなく、それを学習のために用いる人も多いようである。

日本での利用経験があると答えたのは 473 人で、その内容は表 9 に示した通りである。

表 9 利用経験のある場や機会—日本— (%)

順位	全 体	中等教育	高等教育	学校教育以外
1位	日本人のいる場所、日本人が集まる場所 (67.2)	日本人のいる場所、日本人が集まる場所 (70.0)	日本人のいる場所、日本人が集まる場所 (70.1)	日本人のいる場所、日本人が集まる場所 (58.8)
2位	日本人家庭への訪問・ホームステイ (44.2)	日本人との交流会 (30.0)	日本人家庭への訪問・ホームステイ (50.7)	日本人家庭への訪問・ホームステイ (40.3)
3位	日本人との交流会 (27.7)	日本人家庭への訪問・ホームステイ (20.0)	日本人との交流会 (30.6)	日本人との交流会 (19.3)

(複数回答可)

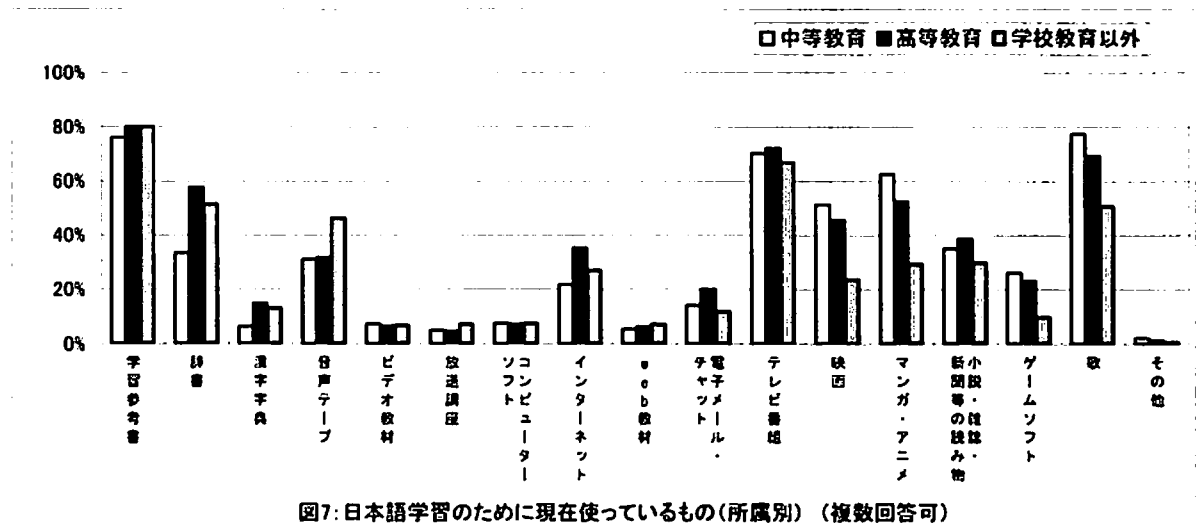
利用経験のある場や機会の中で、再度あるいは継続して経験したいものがあると答えた回答者1,164人に、最も経験したいものを1つ選んでもらった。全体では「日本人がいる場所、日本人が集まる場所」「日本人家庭への訪問・ホームステイ」「日本・日本語に関するイベント」の順で回答者が多かった(表10)。日本人との交流が期待できる活動に対する要望が高いことがわかる。

表10 再度あるいは継続して最も経験したい場や機会 (%)

順位	全体	中等教育	高等教育	学校教育以外
1位	日本人のいる場所、日本人が集まる場所 (18.2)	日本人のいる場所、日本人が集まる場所 (18.7)	日本人家庭への訪問・ホームステイ (18.8)	日本人家庭への訪問・ホームステイ (19.4)
2位	日本人家庭への訪問・ホームステイ (17.6)	日本・日本語に関するイベント (14.2)	日本人のいる場所、日本人が集まる場所 (18.7)	日本人のいる場所、日本人が集まる場所 (15.6)
3位	日本・日本語に関するイベント (11.7)	日本人家庭への訪問・ホームステイ (13.1)	日本・日本語に関するイベント (11.3)	日本語が使われている職場でのアルバイト・仕事 (12.4)

3.5. 日本語学習のために使っているもの

日本語の学習のために、現在使用しているものについてたずねたところ、全体では、「学習参考書・問題集」(79.0%)が最も高く、「日本語のテレビ番組」(71.1%)、「日本語の歌」(69.1%)がそれに続いた。図7に見られるように、中等・高等教育では、テレビや歌のほかに、マンガ・アニメ、映画などを使う回答者も多く、自分自身の興味・関心に応じて、楽しみながら学習している様子が伺える(図7)。



3.6. 今後の充実を希望するもの

日本語学習や日本理解のために、今後さらに充実を希望するものは何かをたずねたところ、表11に示す結果となった。すでに述べたように、「日本のテレビ番組」は、連日、放送されており、それを日常的に見ている学習者、学習のために利用している人はかなり多

いのだが、より一層の充実を希望している。その一方で、日本人との交流や留学の経験者は現在、それほど多くはないが、そういった機会の充実を期待する声も高い。希望するものの中で「特に希望するもの」を1つ挙げてもらったところ、全体では「留学の機会」(27.8%)「日本人との交流」(24.0%)「日本語のテレビ番組」(19.6%)の順となったことから、現在はまだ充実しているとは言えない留学や交流の機会とともに、ある程度充実し、活用できていると言えるものについてもさらに期待をしていることがわかる。

表 11 今後の充実を希望するもの (%)

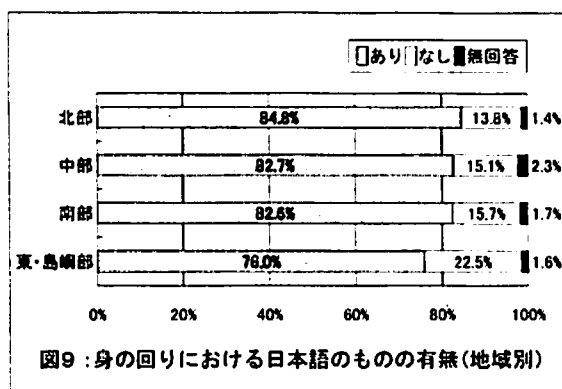
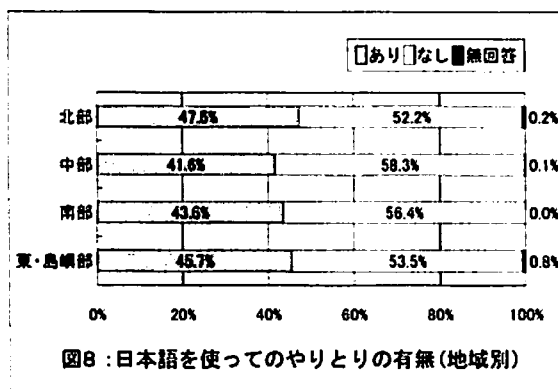
順位	全 体	中等教育	高等教育	学校教育以外
1位	日本語のテレビ番組 (64.0)	日本語のテレビ番組 (67.8)	日本語のテレビ番組 (63.3)	日本語のテレビ番組 (59.2)
2位	日本人との交流 (58.5)	留学の機会 (58.6)	日本人との交流 (60.5)	学習参考書・問題集 (52.8)
3位	留学の機会 (54.9)	日本人との交流 (58.4)	留学の機会 (57.1)	日本人との交流 (49.5)
4位	学習参考書・問題集 (53.5)	日本語の映画 (56.1)	学習参考書・問題集 (53.4)	辞書 (45.6)
5位	日本語の映画 (49.3)	学習参考書・問題集 (54.2)	日本語の映画 (49.9)	日本語の小説や雑誌,新聞などの読み物 (40.6)

(複数回答可)

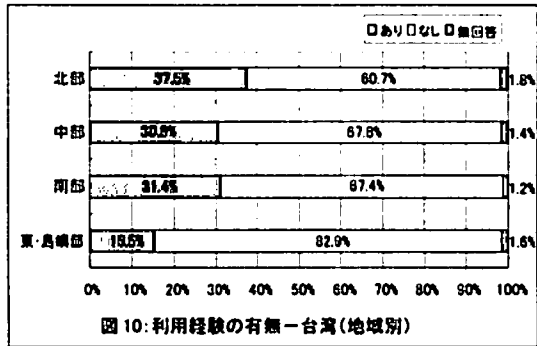
3.7. 台湾における地域差

台湾は、大きく北部、中部、南部、東・島嶼部という地域に分けられる。ここでは、地域によって日本語や日本人との接触の度合いが異なるのかどうかを比較する。

まず、3.2で取り上げた「授業以外で日本語を使ってやりとりをするかどうか」だが、地域間での大きな差は見られない(図8)。また、3.3で取り上げた「身の回りに日本語で書かれたものや日本語が使われているものがあるか」についても、大きな差はない(図9)。日本人が多く住み、日本に関する情報なども入手しやすい台北市を中心とした北部地域において、他地域よりも日本語に接する機会が多いことが予想されたが、実際は地域による差はさほど大きくなかった。また、台北市、台中市、高雄市といった都市部とそれ以外の地域についても比較を試みたが、ヒトとモノについては大きな差はなかった。



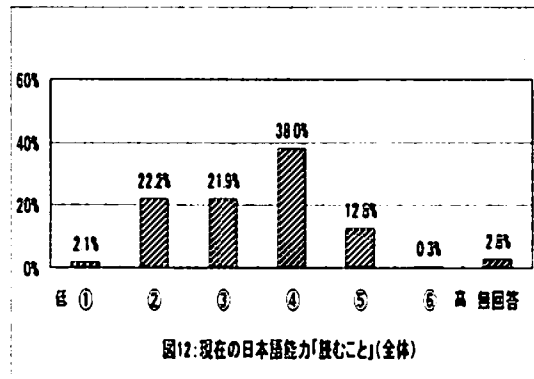
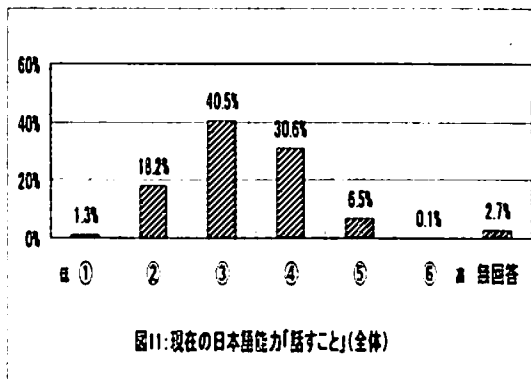
地域による差が見られたのは、コトについてである。3.4で取り上げた「授業以外の日本語学習の場や機会を利用したことがあるかどうか」に関し、台湾での経験については、図10に示す結果となった。東・島嶼部では、利用経験があると答えた割合が他の地域の約半分となったのである。これは、ヒトやモノについては、インターネットやテレビ放送の充実等により、地域差がなくなっているのに対し、東・島嶼部では、利用できる場や機会そのものが他地域よりも少ないということによると考えられる。



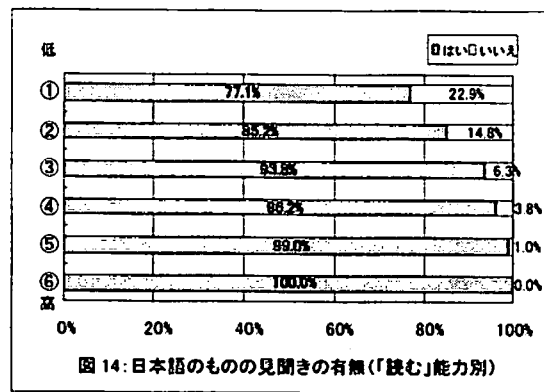
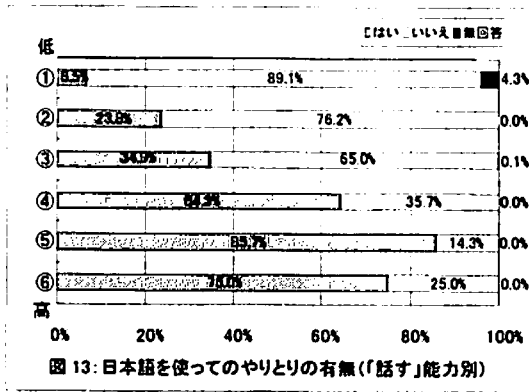
3.8. 日本語能力による比較

本アンケート調査では、日本語能力とリソース利用の関係について知るために、「読む・書く・聞く・話す」の4技能それぞれの能力について、6段階で自己評価してもらっている。6段階とは、「話す」能力については、①「全くできない」②「挨拶ができる」③「簡単な自己紹介ができる」④「日常生活に必要な表現を状況に応じて使える」⑤「自分の意見や考えを話すことができる」⑥「母語と同じように話せる」。「読む」能力については、①「全くできない」②「ひらがなとカタカナが読める」③「よく使われる漢字なら日本式に読める」④「簡単な文章ならだいたい理解できる」⑤「新聞や雑誌、興味のある分野の本などがだいたい理解できる」⑥「母語と同じように読める」である。

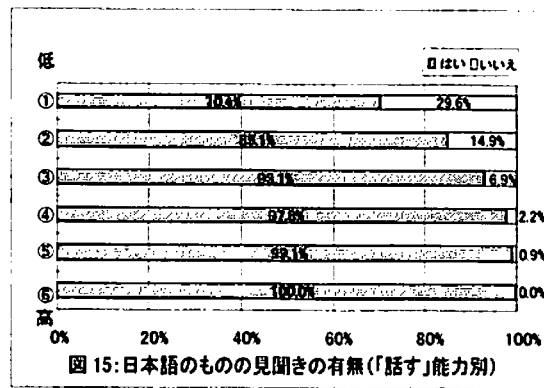
ここでは、「話す」「読む」の能力と、リソース利用との関係について分析する。尚、「話す」能力と「読む」能力について、回答者は図11、図12のように自己評価している。



まず、3.2で取り上げた「日本語を使ってのやりとりの有無」だが、図13に示すように、話す能力が低い場合は日本語を使って人とやりとりをする人は少なく、話す能力が高いほうがやりとりをする人が多い³。しかし、「読む」能力に関しては、能力が低いからといって、日本語で書かれたものや日本語が使われているものを見聞きしないわけではなく、能力が低くてもかなり多くの学習者が日本語のものを見聞きしている(図14)。

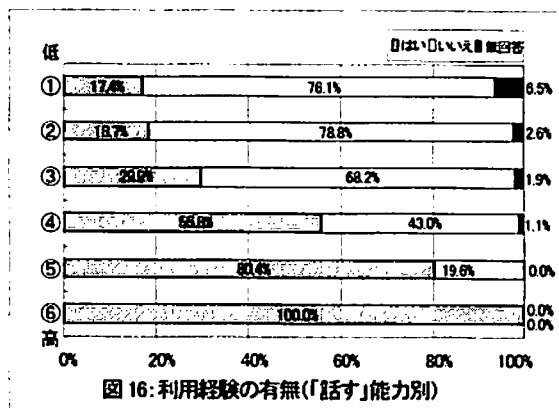


これは、「話す」能力との関係でも同様で、たとえ「話す」能力が低くても、日本語のものを見聞きしている人は多い(図 15)。仮に、挨拶程度の日本語しかできない学習者であっても、授業以外の時間に日本語のものを見たり読んだりしている可能性は非常に高いのである。



人とのやりとりにおいては、相手の日本語を理解し、自分も日本語を発するという

ことをしなくてはならず、ある程度の日本語能力が必要となるが、もの見聞きにおいては、わからなければわからないままにしておいたり、また、わかるところだけを見たり聞いたりするなど、自分のペースで自分の能力を発揮することが可能である。印刷物であれば、辞書を引きながら読むこともでき、また、ビデオであれば、巻き戻しも可能ということで、対象によっては何度も繰り返して読んだり聞いたりすることができるのである。そのために、能力に関わらず、多くの学習者がモノに接していると考えられる。また、漢字を共有する台湾の学習者にとっては、日本語で書かれたものはある程度、内容を類推することも可能であり、それによってモノへの接触に対しての抵抗がないとも考えられる。



しかし、「話す」能力の高低とヒトとの接触度合いに関係があるように(図 13)、コトの利用、つまり日本語学習に関する場や機会の利用においても、能力の違いとの関係が見られる(図 16)。日本語を話す能力が低い場合には、コトを利用する人は少なく、能力が高ければ利用者も多いのである。これは、そういった場や機会においては、人とのやりとりが含まれる場合が多く、話す能力が低い学習者には利用が困難に感

じられたり、そういった場や機会が十分に活用できないと判断されたりすることによるのかもしれない。また、日本語能力が低いために、日本語学習に関わる情報の入手が困

難であるということも考えられる。

4. 台湾調査からわかることと今後の課題

台湾で行われたアンケート調査結果を中心に分析し、台湾の日本語学習者がリソースをどう利用しながら日本語を学んでいるかを述べてきた。他調査地域との比較、台湾の中での地域間比較、日本語能力による比較などを通じて、以下のことが明らかになった。

- 1) 全般的に、台湾の学習者は他の調査地域に比べ、リソースに接する機会が多い。
- 2) 他の調査地域に比べ、日本語のテレビ番組や歌に触れる学習者が多く、それらを日本語の学習のために利用している者も多い。
- 3) 台湾においては、ヒトとの接触やモノの有無について、地域による差はほとんどない。
- 4) 台湾においては、日本語能力(話す)が高いほど、ヒト・コトの利用度が高いが、モノとの接触には日本語能力は関係がない。つまり、日本語能力が低くても、学習者はモノとの接触は行う。

本稿で取り上げたのは、台湾で行ったアンケート調査の一部である。台湾の中での地域間比較や、日本語能力による比較も部分的に行ったが、多くの項目について、同様の比較を行う必要がある。また、年齢や学習歴などを観点にして比較など、台湾の日本語学習者のリソース利用について、その特徴を明らかにするためにすべき分析はまだ数多く残されている。さらに、他の調査地域との比較を通じて、それぞれの地域の特徴と同時に海外の日本語学習者の共通点というものを明らかにしていく必要もある。

尚、本稿で試みた分析は、いくつかの問題点を含んだものとなっている。まず、調査時期の異なるものを比較していることである。実施体制の問題などから、全地域一斉にアンケート調査を行うことができず、かなり実施時期の隔たりのあるデータを比較することとなった。特に、技術の進歩が著しいリソースを選択肢に含んでいる質問については、その結果を解釈する上で、十分な注意が必要である。

技術の進歩とリソース利用の関係について考えた場合、技術革新が学習者のリソース利用に与える影響と同時に、影響を受けない側面もあると予想される。影響を受けない側面は何なのかを明らかにしていくことも、今後の課題の一つとして挙げられる。

以上の課題については、今後、分析を重ねることにより解明し、また、新たに類似の調査を定期的実施していくことにより解決できるのではないかと考えている。

注

- ¹ 台湾におけるアンケート調査に関する結果は、国立国語研究所(2005)を参照のこと。
- ² タイ(2001年12月)、韓国(2003年3~9月)、台湾(2003年12月~2004年2月)、マレーシア(2004年6~7月)の順に実施している。
- ³ 「話す」能力の⑥「母語と同じように話せる」と自己評価している回答者は、4名しかいないため、この後の分析には注意を要する。

参考文献

- 国立国語研究所(2002)『平成13年度 日本語教育の学習環境と学習手段に関する調査研究
－タイ(バンコック)アンケート調査集計結果報告書』
- 国立国語研究所(2004)『平成15年度 日本語教育の学習環境と学習手段に関する調査研究
－韓国アンケート調査集計結果報告書』
- 国立国語研究所(2005)『平成16年度 日本語教育の学習環境と学習手段に関する調査研究
－台湾アンケート調査集計結果報告書』
- 国立国語研究所(2005)『平成17年度 日本語教育の学習環境と学習手段に関する調査研究
－マレーシアアンケート調査集計結果報告書』